

論文の内容の要旨

氏名：植 松 昭 仁

博士の専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：Factors influencing adherence to nasal continuous positive airway pressure in obstructive sleep apnea patients in Japan

（日本における閉塞型睡眠時無呼吸症候群患者の経鼻的持続的陽圧換気(n-CPAP)療法のアドヒアランス影響要因に関する検討）

閉塞型睡眠時無呼吸(Obstructive sleep apnea: OSA)に対して、経鼻的持続的陽圧呼吸(Nasal continuous positive airway pressure therapy: n-CPAP)の治療効果を十分にえるためには、良好なアドヒアランスの維持が不可欠であるが、実際の外来診療では治療を継続させることすら容易でない患者が存在する。ゆえに、n-CPAP のアドヒアランスに影響をあたえる要因の評価は実地臨床においてきわめて有益であるが、未だにその要因は明確ではない。その理由として、終夜睡眠ポリグラフ検査からえられる OSA の重症度や覚醒反応指数、あるいは CPAP の治療圧といった客観的なデータよりも、各患者の OSA にともなう臨床的症状の強弱や治療に対する印象や副作用の強弱など各患者に依存する主観的要因によってアドヒアランスは大きく影響され、したがって客観的データに基づく一元的な指導や対応ではアドヒアランスの十分な改善が得られないと考えられる。

そこで私は、CPAP アドヒアランスの影響要因を明らかにするため、日本大学医学部附属板橋病院睡眠センターで n-CPAP 療法を導入し一年以上が経過した OSA 患者で質問票を用いてレトロスペクティブに検証を行った。有効回答がえられた 732 名を、自己申告によるアドヒアランスによって治療中止群、アドヒアランス良好群と不良群の 3 群に分類した。さらに、回答から集計された CPAP 療法のさまざまな副作用や問題点を 3 群間で比較して、アドヒアランスに影響する要因について解析した。

n-CPAP 療法のアドヒアランスは 78.1%で、治療中止の予測因子として 3 回答（“治療に伴う呼吸困難感”、“治療に伴う不眠”、そして“治療効果の実感がない”）と、アドヒアランスの不良化の予測因子として 2 回答（“治療圧の違和感”と“マスクの無意識の外れ”）がそれぞれ同定され、CPAP アドヒアランスの影響要因として、各々の患者の主観的要因の重要性が示された。良好なアドヒアランス維持のために、治療導入後は患者との積極的な対話の中でアドヒアランスの悪化につながるこれらのリスク要因を持つ患者をなるべく早い段階で特定し個別に適切な対応を施すことが不可欠である。

CPAP 管理において、我が国の保険診療システムは月に一度の外来受診を義務付けているが、この毎月の診療によって患者の個々の訴えに対して速やかな対応を可能にする。本研究のアドヒアランスデータは欧米の過去の報告と同様の結果ではあったが、毎月の外来診療の十分な活用により、良好なアドヒアランス維持に対する本邦の CPAP 管理体制の潜在的な優位性が示唆される。